

若者が定着する地域をめざして

承継可能な農業環境の 確立を目指して

株式会社いやさか農園

NPO法人いわてアグリサポートネット会員・石山伸悦

3年前、農畜産物の生産販売によって地域社会の発展を目指す株式会社が一関市に設立されました。株式会社いやさか農園です。

いやさか農園の事務所は、旧川崎村と旧花泉町を結ぶ県道48号線沿いに、山間を上るように水田が連なる一関市弥栄地区にあります。繁栄を祈って叫ぶ際の「いやさか」と表記が同じことから会社名は「いやさか」としたそうです。

年が明けた1月中旬、遠慮がちに立てられている看板に従って事務所におじゃましました。社長の佐藤徹さん、取

締役花卉園芸部長の佐藤勲さん、同じく取締役総務部長の小野寺泰男さんが会社の概要を説明してくださいました。

農地と人材を未来へ

いやさか農園は、高齢化や若者の地域離れ、農地の遊休化などの状況に対して地域農業を守る受け皿を作らなければ地域が崩壊するという危機感を抱く5人の仲間が資本を出し合って設立しました。会社の目的を「地域の資源である人材や農業設備を有効に活用して承継可能な農業環境を確立することにより地域社会の発展と当社の利益増進を図

る」と定款で決めました。初めに、株式会社としたのはなぜか聞いてみました。すると即座に「状況の変化に素早く対応するため」という答えが返ってきました。続けて、「若者が働く場所がなくなれば地域が崩壊する。農地と人材という資源を若者につな

ぎ地域を守るには、農業を企業化し若者に働く場を用意するしかない。若者が地域に残れるような働き口が必要だ」。「一関地方でも昭和30年代には乳牛が、40年代には養蚕そしてたばこが、その後和牛の委託肥育さらに園芸へと推進作

会社の概要

名称●株式会社いやさか農園
代表●代表取締役社長 佐藤 徹
設立●平成22年11月1日
資本金●500万円
所在地●一関市弥栄字鶴巻106
電話●0191-48-3836
構成員●2名

経営内容

栽培面積●水稲4.1ha、りんどう
1.1ha、飼料用米、備蓄米
1.7ha、ねぎ0.3ha
ほ場は全て借地
所有機械●コンバイン（4条刈）、トラクター



代表取締役社長 佐藤 徹さん

目はどんどん変化してきた。今の経営もいつか方向転換しなければならぬ時がきつと来る。そのとき状況の変化に迅速に対応するためにも経営体は株式会社としておく必要がある」また、「地域の未来を考えたとき、今ある農地資源を守り発展させること、地域の人たちが生涯生活を送り子どもが育つような職場、これらを整えるためにも業種を超えた老若男女誰でも働けるような雇用を創出する」と熱く語ってくれました。

協賛会が農地借り入れの支えに

この大きな目的を達成する方法として考えられたのが、農地を全て借入地とする経営方針でした。当初は農作業の受託も計画されたようですが、作業受託方式では場合によっては農地の自由な利用が難しく経営者の経営方針とかけ離れた栽培をしなければならぬ

くなることも予想されます。全面委託でも同様の制約は受けることになるので農地を全て借り上げ、農業機械も当面は特に大型機械は借り受けて経営することにしたそうです。農地の集積による経営の効率化を図り、農業機械への過剰な投資も無くすることができるところです。

農地を全て借り上げ農業機械も借り受けるため、地域の人たちに協力をお願いして立ち上げたのが「協賛会」です。登録制による協賛会という方法を理解してもらい地域の協力を得るまで何度も話し合っただけです。その結果、会社が借地した水田は平成23年43ha（貸し手19戸）、24年、25年68ha（貸し手21戸）となり、山間に細長く続く弥栄地区の水田は次第にいやさか農園の借地で連なるようになりました。

農業機械も、過剰投資を避けるためできるだけ地域内に

あるものを利用することになりました。協賛会員から賃借することにしましたのです。

このように協賛会の支えに基づく借地による経営は大きな成果を上げています。同時に、作業受託や離農農地の引き受けも行つて、農作業が間に合わない場合は協賛会の方へ委託しているそうです。

りんどうを経営の中心に

農業を地域の産業として成り立たせ、雇用を生み出すためには人手がかかっても収益性の高いものを栽培したいと取り入れ、面積を増やしたのがりんどうです。

数ある作物のなかからりんどうを選んだのは理由があります。「機械に頼る農業を続けた結果、農家の農業技術は確実に劣ってきたように思える。機械だけではない。肥料や農薬についても同じことが言えるのではないか」そんな想いのなか、経営計画を立て

技術を指導してくれる人が近くにいたのでりんどうの栽培に取り組むことができたということでした。

米は、株式会社であっても補助金があつてはじめて採算がとれるという状況に変わりはありません。平成24年の稲作は146万円の赤字を166万円の補助金収入が補なっているのです。

それに対してりんどうは24年458万円弱と、ほぼ計画通りに販売収入を上げ「りんどうなら収益がでる」ことを再認識しました。そこで、会社を設立して3年目となる平成25年には正社員を一人増やしました。売り上げも1千万円に手が届くほどになり、管内の経営体では最高の成績をおさめるにいたりしました。会社の大きな目的である「地域の働き口」となる企業に一步步近づきました。農繁期のピーク時には6人のおばあさんたちに働いてもらいました。



花き調製作業



りんどうほ場



ねぎ調製作業

表1 栽培面積の推移

単位:a

	平成23年	平成24年	平成25年
水 稲	250.0	407.6	405.5
りんどう	49.2	68.2	105.2
飼料米	56.5	110.5	43.8
加工米	75.7	73.4	—
備蓄米	—	—	108.2
牧 草	—	—	20.7
小 計	431.4	659.7	683.4

表2 平成25年部門別経営実績集計

単位:千円

	稲 作	野 菜	花	作業受託
売上高計	4902	801	9270	790
対前年比	1.01	0.53	2.02	69.74
売上原価計	4464	1461	5736	99
一般管理費計	2180	675	4045	691
営業利益	-1742	-1335	-511	0
営業外収益計	654	372	1390	0
営業外費用	2	0	2	0
経常利益	-1090	-963	877	0

当初休耕田ではじめたりんどうですが26年にはさらに40aほど増やす予定です。そこで今後の方針に話が及んだとき、「これから貸し手はどんどん増えていく。3年間の実績からそれを強く感じる」と3人が口をそろえて言いました。「この地域も他の過疎地域に違わず若者の地域離れ、高齢化、担い手不足は深刻」それに対応するためにも、「会社を誰も働ける地域の働き場として未来へつなげていく」「この地域のほとんどが稲作である以上、米がどうい価格の状況になっても稲作は引き

受けていく」ことを前提に、りんどうに続く作物を早く確立しなければならぬ。ねぎはどうだ、なすはどうか、しいたけは、加工品は、と話し合いが続き、あたかも臨時の役員会のようになりました。

新たな法人の姿に

株式会社いやさか農園の5人の株主は全員が60歳を超えています。これまで地域の稲作を担ってきた佐藤徹さん、佐藤勲さんを囲んで、定年退職するまで地元を離れていた3人が何年か前から地域の集まりの日などに、「このままでは地域が崩壊する。なんとかしよう」と話し合っていたそうです。

そしてついに小野寺さんの退職を目前にした平成22年11月1日、資本金500万円で会社を設立しました。このよ

浮かべながらも「みんなこれまで地元にもできなかつた罪滅ぼしかな」と笑って言いました。田の畔の草刈りは5人の役員が無償で請け負っているそうです。「農業を一つの地域産業として確立させたい」という地域への並々なぬ想いが感じられました。

事務所の壁に木造りの額に納められた一関地方農林業賞「担い手部門賞」が飾られていました。お年寄りの働き口を確保し、若者へ技術を伝え、自らは農業承継者への中継ぎとなつて「永続的に承継できる地域社会を確立する」ことを目的とした会社が、実は地域農業のかけがえのない「担い手」として大きな期待を寄せられているのです。これからの新たな法人の姿の一つがここにあると思えました。事務所でお話をうかがっているとき「ねぎを出荷してきまーす」という元気な従業員の声が聞こえてきました。